



Title	建築家ジェームズ・アダムとデザイン理論
Author(s)	近藤, 存志
Citation	デザイン理論. 2016, 67, p. 86-87
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56311
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

建築家ジェームズ・アダムとデザイン理論

近藤存志／フェリス学院大学

1. 建築家ジェームズ・アダム

ジェームズ・アダム (James Adam, c. 1732-94) は、エディンバラの裕福な建設業者一家に3男として生まれた。父ウィリアム・アダム (William Adam, 1689-1748) は、スコットランドの有力貴族たちの邸宅建築を手掛けるなど、18世紀前半のスコットランド建築界を代表する存在であった。ウィリアム・アダムにはジェームズを含め4人の息子がいたが、長男ジョン・アダム (John Adam, 1721-92)、次男ロバート・アダム (Robert Adam, 1728-92)、4男ウィリアム・アダム (William Adam, 1738-1822) も皆、建築家として活躍した。ジェームズ・アダムは、特に次男のロバートとともに建築活動を展開し、この2人の協働関係は、今日「アダム様式」(Adam Style) の名称で知られる様式の流行を生み出すことになった。

ジェームズ・アダムは、兄ロバートと同様、エディンバラ大学で学び、グランド・ツアーも経験した。また当時を代表する知識人たちと親交を持ち、最新のスコットランド啓蒙主義の諸理論に触れたことでも知られる。

2. 18世紀中葉のエディンバラの知的交流

当時ヨーロッパ全域で「学術文化都市」として知られていたエディンバラには、知的議論を交わすことを目的に設立されたソサエティーやクラブが複数存在していた。それらの会合には、道徳哲学者や神学者、スコットランド長老教会の聖職者、政界や法曹界の名士、さらには知的議論に純粋に関心を持っていた貴族や地主階級の出身者など、幅広い思想的、社会的背景を持つ人々が多数参加した。

18世紀中葉のエディンバラで特に注目された知的交友組織は、「自由活発な議論に基づく哲学的探究」と「洗練された英会話術の習得」を目的に1754年5月に発足したセレクト・ソサエティー (Select Society) であった。同ソサエティーは、当初会員数を30名と定めてはじまったが、その翌年には会員数が100名を上回り、1759年10月の時点で会員数133名、その後一時期300名の会員数を誇るまでになった。

3. 議会統合以降のスコットランド知識階級と芸術

1707年の議会統合を機に設立された「スコットランド水産・工業・社会向上評議会」(Honourable Board of Trustees for Fisheries, Manufactures, and Improvements in Scotland) は、積極的に芸術振興事業を展開した。この組織は、18世紀中葉のエディンバラ社会の学究的風土の中で、1760年には芸術学校「トラスティーズ (評議会) アカデミー」を創立して、エディンバラを中心としたスコットランドの芸術文化の発展に大いに貢献することになった。

こうした傾向を背景に、「美」や「美的趣味」をめぐる諸問題も、哲学や法律などと同様、多くのスコットランド啓蒙主義の思想家たちの関心を集め、セレクト・ソサエティーのような知的交友の場で議論されるようになった。そうして芸術に関する知的興味は、「美」をめぐる問題を扱った複数の論稿——アラン・ラムジー『趣味をめぐる対話』(*Dialogue on Taste*, 1755)、デイヴィッド・ヒューム「趣味の基準について」('Of

the Standard of Taste', 1757), ケイムズ卿『批評の原理』(Elements of Criticism, 1762)など——を生み出した。

このような知的風土の只中で育ったジェームズ・アダムは、セレクト・ソサエティーの会員に名を連ね、「美」をめぐるスコットランド啓蒙主義の思想家たちの議論に常に身近に触れていた。

4. ジェームズ・アダムのデザイン論

ジェームズ・アダムは、兄ロバート以上に当時のスコットランド社会の知的動向に関心を持ち、建築芸術の諸問題、とりわけ「いかにデザインすべきか」という問題について、当時の最新の哲学的批評(美学)に関する知見と結びつけながら思考した。そして彼は、兄を助けることで建築設計に実際に従事し、さらには装飾の使用、外壁面の扱い、空間の配置などに関する「デザイン」の手法を理論化する試みに着手していった。

ジェームズ・アダムが当時最新のスコットランド啓蒙主義の知識人たちの思索と議論を反映するかたちでまとめた建築に関する「デザイン理論」は、彼が1762年11月に滞在先のローマで書きまとめた草稿 'Of the Elevation and its Movement' である。現在、エディンバラの公文書館に所蔵されているこの草稿の中で、彼は立体物としての建築が視覚的に的確に知覚されるために満たすべき条件として、建築物の外観構成を過剰に複雑化させることの危険性と、装飾要素の抑制的な使用の必要を論じている。ジェームズ・アダムが建築をデザインするにあたって重視したのは、建築物の外形を形づくる外形線・輪郭線と、光が射す明るい壁面と影になる暗い壁面が外壁上に生み出す光と影のコントラストといった「可感的な性質としての二次性質」をいかに効果的に生み出すか、ということであった。それは、近代美学の形成にスコット

ランド啓蒙主義の思想が果たした重要な功績であるヒュームの「美的鑑賞行為に占める二次性質の役割に関する論」に多分に触発されたものであった。

5. 「真に美を判断できる者」としての自覚

ヒュームは試論「趣味の基準について」の中で、真の美を判断するためには「様々な時代や国民において称えられたいくつかの作品を見、吟味し、評価すること」に慣れ親しみ、「精妙な感情と結合し、訓練によって向上し、比較によって完全にされ、一切の偏見を払拭している強靱な良識」を有することが必要不可欠であると主張した。さらに「微妙な芸術に関して真に判断できる者は、きわめて洗練された時代にあっても得難い性格」であること、そして「精妙な趣味の持主は稀ではあるが、人々の交わりの中にあって、そのような人はその悟性の健全さと、他の人たちより諸能力が優っていることによって、容易に際立っている」と指摘した。つまり、もしある芸術家が、真の「美」を判断することのできる域に達しているならば、その芸術家は多様な時代や地域の諸芸術に関する豊かな学識と経験を有し、健全な悟性を持ち併せ、他の人々よりも諸能力が優っている存在、すなわち知識人と呼ぶにふさわしい存在であるはずであった。

大学教育を受け、グランド・ツアーを経験して様々な時代の諸芸術を観察する機会を持ったジェームズ・アダムは、最新の「美」、「美的趣味」の議論にも精通していた。アレクサンダー・カーライルによって「博識で思慮深い人物」と評された彼は、ヒュームのな意味で「真に美を判断できる者」としての要件を満たしていた。建築芸術の表現(デザイン)に関する手法を文字化することで、理論的な規範を定めようとした彼の姿勢の中にも、その自覚を読み取ることができよう。